

ウエルフェア・リングイステイクスから見た私のささやかな取り組み
(若井誠二、カーロリ・ガーシュパール・カルビン派大学)

「人々の幸せにつながる」「社会の役に立つ」「社会の福利に資する」言語・コミュニケーション研究と言われているウエルフェア・リングイステイクスの対象となるのは、一般的に（言語弱者、移民、少数民族など）社会的弱者が直面する言語問題である。従って、教室にそのような立場の学習者がいない場合、第二言語として日本語を教える教師がウエルフェア・リングイステイクスを深く意識しながら日々の授業活動を行うことはあまりないかもしれない。しかし、本当にそうなのか。

青木（2011）は日本に住む外国人が自律的に日本語を学んでいくためには「彼らが会話の流れをコントロールすることを認める」「ノンネイティブ・外国人というラベル付けをせず、社会的活動参加を制限しない」「学習時間や場所、リソースへの自由なアクセスを制度として保障する」等、社会的保障が欠かせないと主張する。この状況の改善はウエルフェア・リングイステイクスにつながるものと言える。青木の主張は外国人を取り巻く日本社会のあり方を意識したものである。しかし、ごく一般的な第二言語教室においても、教師やクラスメートによる「学習者の自主的発話の妨げ」「能力・性別・性格による学習者のラベル付け、それによる（善意のグルーピングなどによる）学習活動参加の制限」「学習者の学習時間や場所の確保、リソースへの自由なアクセスを制限するルール・規範」という問題が存在しているかもしれない。そして、もしこのような問題が存在するとき、それを改善しようとすることは（教室という社会を改善するための言語・コミュニケーションという）ウエルフェア・リングイステイクスの考えにつながるのではないか。このように考えると、私たち日本語教師はいつどこで誰に教えていても、日々の授業をウエルフェア・リングイステイクスを意識しながら行うべきと言えるだろう。

教室という社会を改善するための働きかけにはいろいろある。教師が自らの言動を振り返り、学習者全員が自らの力を発揮できるためのアプローチを考え実行することもそうであろう。また教師と学習者が協力し、教室内や教室を取りまく社会的環境（例えば学校全体の環境）を改善するために考え動くことも、その1つであろう。本発表ではこうした視点より、私のささやかな取り組みについてお話ししたいと思います。